
パラサイトドリーム

もみじ珠熙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パラサイトドリーム

【Nコード】

N2085Y

【作者名】

もみじ珠熙

【あらすじ】

過去の傷を抱える楓。担当医である町田。

楓はしだいにおかしな夢を見るようになる。その夢で繰り返し広げられるストーリーと、現実の世界で繰り返し広げられるストーリー。

2つの世界で楓が見るものは…。

実際に私が見た夢を題材に書きました。

僕らの世界（前書き）

これから始まるストーリーの幕開け、
第一話です。よろしくお願い致します。

僕らの世界

私は何故、ここに生き、ここに在るのか、いつも問い続けてきた。ここにいたいから、と望んだわけではない。

ただここが、私に用意された世界なだけなのだ。だから、ここで生きるしかないだけ。

ただ毎日を、この世界の法則に従い生きる。

> i 3 4 1 2 1 — 4 3 3 3 <

冬の風邪はとても冷たく、彼女の両手はコートのポケットへと移動した。

長い黒髪に黒のPコート、黒のロングスカートに黒いブーツ。全身真っ黒で彼女は病院に現れた。受付に診察券を渡す。

受付の看護婦が、優しい笑顔で問いかけた。

「あら、楓ちゃん、今日はいつもより早いわね？ 診察時間まで待つてもらえるかしら？」

表情を変えずに、彼女は頷き、待合い室の端の椅子に向かった。

チラリと時計に目をやると、10時30分。

予約していた診察時間は11時だ。

いつもはギリギリにしか来ないが、今日はいつもより30分も早く着いてしまったことに、彼女は少し驚いていた。

担当医である町田は、目尻にカラスの足跡のような皺をつくり、楓を迎え入れた。

「こんにちは。体調はどう？」

「特に変化はありません。」

「そう。今日はいつもより早めに来てたみたいだけれど、何かあったのかい？」

町田は、パソコンに向かい、キーボードに指をのせながら、楓に問いかけた。

「意識して早めにきた訳じゃありません。ただ…」

楓は言葉を考えている様子で、しばらく宙を見ていた。

そのうち、淡々と話し始めた。

「最近、声が聞こえてくるんです。」

はつきりとじゃあないんですが、声が。

私の心の声と言うわけではなくて、他人の、それも知らない声で。」

町田のキーボードを打つ音が響く。

「その声は、君に話しかけてくるのかな？」

町田は、手を止め、楓の表情を確認するかのように見つめる。

「話しかけているのかはわかりません。だって私はその声に返答しないし、そうするとその声が、無視しないで！と言うわけでもありませんから。」

また、カタカタと町田の指が動き始めた。

「ふうん、そうか。例えば、その声は、何て言っているのかな？」

「はい、君は一人じゃない、と言ってきたことがあります。後、覚えているのは、迎えに行くから、と。」

「君を迎えに行くということ？どこに迎えに行くんだい？」

「さあ。知りません。」

「先生はピアノ弾けますか？」

「なぜそんなことを聞くの？」

「先生のタイピング、ピアノみたいだから。」

「ああ、そうだね、でもピアノは弾けないと思うよ。触ったこともないんだ。」

「ふうん、期待外れです。」

「はは、ごめんね。」

町田は謝りながらも嬉しそうに笑った。

楓を見送った後、町田はパソコンに向かい、気が重くなった。何か悪いきっかけがあったんじゃないだろうか？薬のせいだろうか？彼女がこれ以上ふさがぎ込む姿は見たくない。彼女の傷をえぐるようなことがなければいいのだが。

楓と初めて出会った日を、今でも忘れない。

八年前、楓は中学2年生、僕は28才で、当時楓の担当医は僕の父であった。僕は新米だったから、父の後ろで二人のやり取りを見ていただけだった。

楓はどんなに父が優しく接しても、父に怯え言葉も上手く話せずにした。かと思えば、これは夢だ、夢だ、とわめき、自分を殴り始めた。

事件のことは知っていたので、そんな楓を見ると胸が張り裂ける想いだった。

父が引退し、僕が独立すると同時に、楓はここに来るようになった。楓は22才になり、大人になったのに、今でも傷は深いまま、孤独に生きている。

事件の犯人も見つからないままだ。

楓を抱きしめてやりたいと何度も思うが、立場上、僕に出来るのはカウンセリングし、薬を出す以外何も出来ないのだ。

今日の発言は明らかに症状の始めだ。

僕はなんて、無力なんだろう。

町田は、光が眩しく感じて、カーテンを閉めた。

僕らの世界（後書き）

読んで下さった方、どうもありがとうございました。
感謝です！

これからゆっくり話が動き出していきます。
次回もよろしくお願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2085y/>

パラサイトドリーム

2011年11月4日10時15分発行